

● 高澤良一 第五句集 鳩信

● 玄帝

歩かぬは万病の因もと花八つ手

作そもさん塵生と実ざくろ問ひ掛けくるごとし

冬菊のいちめんそれもしうじ麴色

また一つ家毀たれて枯木星

町内の左官屋の菊三色みいろほど

朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ

ため息を一つつくごと帰り花

臍物の如き朝刊取りに冬

七五三紅葉坂 伊勢山皇代神宮あっさり組と凝り組と

もどかしく磴を登るも七五三

おねだりの僕は僕はの七五三

水野毛山動物園の面に桜紅葉の心ばえ

アナグマに落葉臭さと尿くささ

落葉手にとり霊長目ひと人間科ひと人間

アムール虎右往左往の黄落期

もみずれりオランウータンの体毛も

堂前龍ノ口竜口寺に靴の累々御命講

御命講鳩の目をして祖師さまは

雀等も連れ立ち御宗祖日蓮忌

葛黄葉遠慮がちなる色合ひに

くわりん落つ落つるとおもひぬし矢先

枇杷の花そこはかとなく癒ゆる傷

火がとほって来たたと湯豆腐動きけり

一飛雪塩原行ひゅうと川面をよぎりけり

旅仲間雪っこといふ濁り酒

川向ふ今しも木の葉時雨かな
残る葉の幾枚枯木のプ・ラ・タ・ナ・ス
次々降る山の木の葉と歩を一に
涸川の涸れ灌木に移りけり
紛れ込む落葉一片脱衣籠
路線バス
枯れ木つ葉臭き湯町の子が乗り来
川端の鴨の口々雪来ると
宿木にほうと佇む耳袋
おとがひ 煤逃げの地は三浦半島大根台地
頤に大根台地の風鳴れり
膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅
岬なればこその日溜り藪つばき
切干に午後から波の納まりぬ
切干は紐に跨り相模灘
割干に日の経ち方といふがあり
頬被正月ものの覗突漁
みつきりよう
手術などそんなこんなひとこせの一年で
いてふの木枯れて素性といふが見ゆ
銭湯の逝く年映す大鏡
ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠
一年の始めの氣息もて起床
歳旦吟誌上古風当風張り合うて
かんだりするから額縁歳旦吟
心臓のポンプ順調去年今年
初詣羽田航空神社かな
句をつくるはた又授かる太郎月
知多半島 篠島行
心臓の直しが利きて旅始め
宮津昭彦さん
地図好きの方と初旅して三河

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

寒木瓜咲き窯元家裏相似たり

土管坂土管の端に水仙花

常滑の土管色して咲く菊も

窯主が湯呑みまけ呉れ初商

横腹に知多の朝日よ冬鷗

乗初の胴震ひせる高速艇

何の生簀かんの生簀と知多初旅

三日果て金海鼠きんこ色なる鳥羽の空

正月顔せる皮剥を賞味せり

ひよろろんと雨の四日のとんびかな

見夜火堂夜*見夜火堂は灯明台（灯台）のこと又倍子の実のくろぐろと

百合鷗浜より翔ちて伊勢の方

東風吹いてちりめんじゃこの水揚場

捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅

*島弘法は島内八十八ヶ所にある石仏
明日葉の道を巡りて島弘法

神明神社
三日の灯入りて男宮の常夜燈

半田運河昔日
酔を運ぶ舟の往来冬鷗

醸造元飯桐の実のたわわなる

七種の富士はずしろ色をして

隆起せる傷跡撫づる寒の入

古傷をつゝかれしごと鴟啼けり

枯蔓朝比奈峠越のずるずる引けて土埃

羽ばたいて桜の芽立ち促せる

枯蔓のやみくもをまのあたりかな

枯蔓の嘗ての一途なべて見ゆ

ターザンが目をつけさうな枯蔓も

山清水鳴れり朽葉を潜り出て

冬の清水音色もろとも掌に汲めり

春塵杉本寺の分厚く赤茶け煤仁王

風葉山行に乗る手際宜しも冬鷗

べっとう時化鳶大胆に急降下

浅春の男波女波をおっぺして

紅梅は生菓子ほどの湿りもて

白梅のはたと膝打つ明るさに

川いっぱい使って春の水ながる

接骨木の芽と手を添へて申さるる

奥石廊下田 石廊崎行アロエ畑の中に村

下田港きだちちようせんあさがお咲く

ハイビスカス花の真中の突起物

春愁ふウツボカズラに指入れて

完熟のパイヤヤそれを賞味せん

ラン棟に舌噛みさうなランの名も

石廊崎沖ターナーの冬白浪

安直楼唐人お吉経営の店余寒車軸を流す雨

総領事玉泉寺ハリス好みの仏手柑

総領事ハリス出府圖春の雨

熱川の宿てふ宿の春灯